広島大学附属小学校『研究紀要』第５１号　2023

＜他者＞を楽しみ続ける国語科授業
－「対象の論理」と「主体の論理」を切り口として－

国語科研究部

１　国語科における＜他者＞を楽しみ続ける姿

学習者が，教材を初めて読む時，学習者にとってその内容が目新しかった場合，それは学習者にとっての〈他者〉として捉えることが出来る（〈他者〉①)。また，授業によって初読の段階では気づかなかった教材の姿も〈他者〉として捉えることが出来る（〈他者〉②)。さらに，自分とは違う「読み」を示す教室の中の友達もまた〈他者〉として捉えることが出来る。(〈他者〉③)。このうち，本校国語部が研究の対象として注目するのは〈他者〉②と〈他者〉③である。②と③は，読めていたはずの内容が別の姿で学習者の前に立ち現れてくる様相であり，読み深めたり，読み合わせたりすることによる効用の実感が〈他者〉の立ち現れと共に起きるものである。同じものを読んでいるにもかかわらず，それが別の姿で立ち現れてくる。このような認識の変容をこそ，国語科授業（主に「読むこと」）における重要な視点と考える。このような国語科授業を実現していくためには，まずは，教師の役割が重要となる。学習者が自分の認識の枠内で思考し答えを導き出すような学びを教師が求めるのではなく,〈他者〉との出合いによって自分の価値観が揺らいだり，更新したり，新たに作り出されたりすることに価値を置いた授業を構想し，実践し続けていかなければならない。そしてその実践を子どもたちが楽しいと感じるものにする必要がある。次に，子どもたち自身の学習へ向かう態度も重要となる。理解するということは，自分の認識の枠に収まるということである。つまり，理解することでその〈他者〉性は立ち消えていくことになる。だからこそ，子どもたちは，理解したつもりになって満足するのではなく，新たに自分の認識の枠内に収まらない〈他者〉性を追い求めていく態度が必要となってくる。また，それぞれの学習者が自分の個別性を表出することに抵抗を感じることなく，表出された個別性を互いに受容できるような人間関係をつくっていくことも大切なことである。

このような〈他者〉を楽しみ続ける児童の姿を実現するために,「対象の論理」と「主体の論理」を切り口とした国語科としてのアプローチについて述べていく。

２　授業づくりについて

（１）「対象の論理」と「主体の論理」とは

本研究における「対象の論理」とは，「文章構成など，テクストの中に存在する論理」のことを指す。また，「主体の論理」とは，読み手である主体（わたし）が，テクストをどう解釈（理解）し，納得したかを論理的に整理したもののことを指している。

学習者の意見を「論理」として見取ることで，学習者が何を根拠に，どう解釈して，その主張に至ったのかを分析的に見つめることができるようになる。

説明的文章の教材の中には，テクストの中に明示的な論理性が存在し，読み手の解釈を必要とせず「対象の論理」を読むことができる場合もある。文学的文章では，明示的な論理性が一見すると見えづらいため，読み手の解釈に大きく依存する場合が多い。このように文種やジャンルなどによって「対象の論理」と「主体の論理」の関わり方には違いがあるが，読むという行為は，基本的には読み手の解釈を伴うものであるため，「対象の論理」と解釈の論理である「主体の論理」を切り離して考えるのは難しい。国語科の授業の中では，「対象の論理」を読む上で「主体の論理」が働いたり，「主体の論理」を読むために「対象の論理」を読んだりと，この２つの論理をどう行き来させるかが重要になる。

（２）「対象の論理」と「主体の論理」の視点を取り入れることの効用

「対象の論理」と「主体の論理」の視点を取り入れることの効用を「授業前」と「授業中」の二つの場面で整理した。

○　授業前

教材を分析する際に「対象の論理」と「主体の論理」の視点を取り入れることにより，筆者の論理構成を見える化出来る。これにより，論理の飛躍や空白が明らかになり，授業で扱うポイントを見出すことが出来る。また，授業で学習者が語る意見は，「対象の論理」について語るものと，「主体の論理」について語るものとが混ざることが多い。教師が二つの論理の概念を持つことは，授業で発されるこうした意見を事前に棲み分けて想定することにつながる。

○　授業中

授業で学習者が語る意見は，「対象の論理」について語るものと，「主体の論理」について語るものとが混ざることが多い。教師が二つの論理の概念を持つことは，授業で発されるこうした意見を棲み分けて整理し，議論をより建設的なものへと高めていくことにつながる。また，「対象の論理」と「主体の論理」との往還を意図的に仕組むことで，学習者の生活経験に基づいた理解を促すことができる。更に「主体の論理」同士の意見交流を意図的に仕組むことで，自分とは違った意見に触れ，自らの「論理」の再考・吟味を行うことができる。

このように，二つの論理が存在することを理解し，意図的に区別しながら，問いや課題をつくったり，児童の発言を聞き取ったりすることは，より説得力のある深い読みを実現し，〈他者〉性を立ち上げることに寄与すると考える。　（文責　溝上　大樹）